# ヘルスツーリズム（Health Tourism）についての考察

米　村　恵　子*

## はじめに

2007年からわが国の観光政策は新たな時代に突入した。観光立国が主要政策のひとつにあげられ，1963年以来の「観光基本法」を全面改訂，新たに制定した「観光立国推進基本法」が2007年1月1日より施行されるようになったのである。背景にはわが国の国内事情のみならず，国際化，情報化，高齢化，環境への配慮，南北格差など，地球社会を取り巻く状況変化がある。同年6月29日には「観光立国推進基本計画」が閣議決定され，それを受けた具体的施策が展開されることとなった。

21世紀は観光の世紀といわれる。観光の持つ広範な可能性を再確認し，その，他には替えがたい独自の社会的意義を支援・活用するため日本では法律が改正され，2008年10月1日には専管官庁として観光庁が発足した。2007年発行の『平成19年版観光白書』はニューツーリズムの創出・促進を政策の柱に掲げており，その主要分野としてヘルスツーリズムに大きな期待が寄せられている。ヘルスツーリズムは観光の持つ効果のなかで，人間の心身両面での健康への効果がより期待できる観光で，古くから存在したが，近年，概念や範囲を整理して，高齢社会の主要観光のひとつに位置づけられようとしているものである。

2009年夏の政権交代により成立した鳩山内閣も観光立国政策を継承，観光を担当する国土交通大臣は観光関連予算のさらなる大幅増大方針を打ち出している。

2009年11月30日受付
* 江戸川大学　ライフデザイン学科教授　社会学

「観光立国推進基本法」で述べられている観光の意義は以下の4つに整理することができる。

① 地域住民が誇りと愛着を持つことができる活力に満ちた地域社会の実現（地域活性化）
② 相互理解の増進による国際平和
③ 余暇の有効活用による健康でゆとりある生活の実現
④ 多様な事業展開や就業機会・雇用創出等経済社会への貢献

観光の意義の柱のひとつに健康でゆとりある生活の実現があるのなら，本稿で取り上げるヘルスツーリズムは，今や，よく言われるようなオルタナティブツーリズム（もうひとつの観光）ではなく，むしろ観光の主要形態のひとつと理解すべきであろう。事実，名称よりも実態ははるかに先行していて，湯治や転地療養のようなヘルスツーリズム的行動はわが国にも古くから身近に存在していた。それが近年呼称を得，確かな形態として認識されるようになったことこそ着目に値する。今なぜヘルスツーリズムなのか。ちなみに，江戸川大学が立地する千葉県はその先駆的プログラムの実践県でもある。

本稿は，日本におけるヘルスツーリズムの登場と認知の背景，そしてその概念に対する今日的理解について整理し，位置づけと今後の可能性について若干の考察を試みるものである。

## 1. 用語の登場

ヘルスツーリズムという言葉が初めて公式に使われたのは，1975年発足の世界観光機関（World Tourism Organization＝WTO）の前身で1947年に設立された公的旅行機関国際同盟（Inter-

national Union of Official Travel Organization＝IUOTO）のレポートで，1973年のことといわれている。これは，ドイツ，イタリアの社会保険適用による温泉保養地における温泉利用状況についてまとめたもので，同レポートではヘルスツーリズムを“自然資源，特に温泉，気候などを活用した健康施設を提供すること”と説明している。

ここでのヘルスツーリズムは，ほぼ温泉療法中心に理解されているようであるが，この時期にこうしたテーマのレポートが出され，新しい言葉を登場させた背景には，マスツーリズム批判に代表されるような観光の負の側面への批判に答える意図が窺われる。マスツーリズムとは一線を画す新しい観光形態として，健康予防増進手段という側面に期待したことの現われといえる。

ちなみに日本のWTO加盟は，設立から3年を経た1978年7月のことである。

ヘルスツーリズムという言葉や概念はヨーロッパでも70年代以降すぐに普及・定着したわけではない。保険制度の見直しなどを背景に現場でも研究者間でも様々な試行錯誤がなされたようである。1980年代後半には，一般観光施設にヘルスケアサービスと施設を追加しそれを利用して意図的に観光客を誘致しようとの動きが起こる。自然資源・気候・風景の健康効果に期待してこれに専門的な医学システムを重ねるという考え方も登場する。

1990年代になると，リゾートやホテルの事業戦略として，温泉や各種対処方法を用いて治療や健康回復増進を行なうことを指してヘルスツーリズムと称するようになる。また需要サイドの視点で，個人の健康増進を目的のひとつとして日常生活圏を離れた場所で行なうレジャー活動を指すなど，今日，日本で用いられるヘルスツーリズム観に近いものとなっていく。

## 2. 健康概念の変化

20世紀初めまでは，健康とは病気がない状態を指しており，健康は人間の身体的生物的概念であった。こうした概念は，健康をそこねる具体的な原因がそれまでは呼吸器と消化器の障害が中心であったことにも由来するといわれている。その後医学の驚異的進歩により多くの不調が改善される一方，健康も病気も当時とは様変わりしていく。今日では，高齢化の進展による加齢にともなう複合的な健康障害，複雑化した社会ゆえに発生する社会的要因による精神障害・健康障害などが深刻になり，健康観や関心も変化している。

1946年に世界保健会議は世界保健憲章において健康について新たに“健康とは身体的精神的および社会的に完全に良好な状態であり，単に疾病がないとか虚弱ではないというだけではない”と定義し，この理解が今日広く用いられている。HappinessやWellness（生活に支障がないだけでなくよりよく生きようとする状態）と重ねて受け止められてもいる。

健康志向については日本でも70年代に健康づくりブームが到来した。余暇動機・観光動機でも健康志向は常に上位に位置している。

1970年代後半からは治療から予防へと疾病政策が転換され，健康増進政策はストレートに健康ブームに結びついた。休養・栄養・運動が健康づくりの3要素とされ，体力に自信のない人がスポーツをする時代となった。競技スポーツから健康スポーツ・レジャースポーツ・コミュニティスポーツ・コミュニケーションスポーツへと，耳新しい用語が生み出され，「スポーツ・フォア・オール＝みんなのスポーツ」がキャッチフレーズとなる。行政も，健康づくり（厚生省），体力づくり（文部省），トリム（通産省）などの啓蒙施策を積極的に展開する。

しかしながら，予防への関心という健康観の変化が保険制度改革と結びついて，マスツーリズムからの脱却を模索する観光の世界と融合したヨーロッパと違い，この時期の日本では健康志向と観光との結びつきは弱い。社会の成熟度合いや自由時間環境の違いも大きいが，日本の健康志向の視線の先はあくまでも日常生活圏での体力・健康づくりであり，ジョギングブーム，ゲートボール，ボウリングなどが人気を博することとなる。身近で手軽にできることが大事で，競うように職場に

健康器具が置かれたのもこの時代である。

とはいえ，一部には日常生活圏を離れて楽しむ人々も現れ始める。健康志向から発生したスポーツとの関わりが高度化・本格化して，スポーツ行動充実機会として，生活圏以外の地での合宿や大会に参加するという行動様式である。ツーリズムありきではなく，健康のためのツーリズムというよりはスポーツをさらに本格的に楽しむための手段的移動といえよう。やがてホノルルマラソン，青梅マラソンなど非日常生活圏への遠征人口も増大，アマチュア愛好者向けに各地でさまざまなスポーツ大会が開催され，受け入れ側も誘致に積極的に関与するようになっていく。スポーツ大会参加者へのサービスとして栄養への配慮や地域の食が洗練され，結果的に観光資源となってきたが，この時点ではヘルスツーリズムとはいいがたい。

## 3. 日本における認識

1995 年に観光政策審議会がまとめた『今後の観光政策の基本的な方向』では，観光を〈余暇時間のなかで，日常生活圏を離れて行うさまざまな活動で，ふれあい，学び，遊びを目的とする〉と定義している。

以前の審議会での定義（1969 年）における行動部分が大胆なまでに簡素化されており，〈鑑賞，知識，体験，活動，休養，参加，精神の鼓舞等，生活の変化を求める人間の基礎的欲求を充足するための行為〉という文言がすっかり姿を消している。確かに新しい定義のほうがシンプルで明快だが，果たして〈ふれあい，学び，遊び〉という集約でよいのか，やや疑問が残る。

観光は移動を伴う行動と規定されるためアクティブで能動的な側面に焦点があてられがちであるが，移動の目的は積極的な活動だけでなく，リゾート滞在に代表されるような保養・休養・静養等を目的とする行動も観光行動の中で大きな位置を占めている。ヘルスツーリズムは，こうした保養・休養・静養のようなくつろぎ・やすらぎ志向と，よりアクティブな健康増進志向，さらに痛切な治療志向など，心身の健康に関わる諸側面を含む観光行動のひとつといえるのではないだろうか。

1977 年以来毎年発行されている『レジャー白書』は，ここ数年 21 世紀の基幹産業への期待が大きい観光分野について力を入れており，2004 年版では「新たな旅」，2005 年版では「新しいツーリズム」の例をそれぞれ 20 項目ずつあげてアンケート調査（全国 15 歳以上個人対象）を実施し，将来のフロンティアとしての可能性を模索している。

「新たな旅」に対する参加希望率の上位項目を見ると，

① 「同じ場所に 2 泊以上する旅」（76.3%）
② 「家族で楽しむテーマのある旅」（75.2%）
③ 「温泉に 3 泊以上する旅」（74.6%）
④ 「身近な自然とふれあう旅」（73.1%）
⑤ 「大自然を体験する旅」（68.9%）
⑥ 「癒したり健康を増進する旅」（68.8%）

の順で，いずれも約 7 割の人が参加を希望している。ここでのキーワードは，家族・ゆとり・癒し・自然であろうか。「癒したり健康を増進する旅」というのは，近年ひとつの観光形態として認識され，高齢社会や健康志向を背景に注目されるようになってきたヘルスツーリズムを指していると思われる。

日本でヘルスツーリズムが現実の観光形態として認識されるようになったのは 2000 年代に入ってからである。名実ともに高齢社会に突入し，自然環境への関心が高まる中，背景には社会を席巻する強い健康志向があることはいうまでもない。ヨーロッパの動きを先行事例として，自然資源，特に温泉，気候などを活用した健康機会・健康施設の提供を意図して，供給サイド主導で提唱されたものである。既存の形態との差別化を図るため，生理学，医学，心理学，社会心理学等からの効果分析に重きを置く傾向があるが，これには是非もある。

ヘルスツーリズムは，マスツーリズムへの批判・代替から発しオルタナティブツーリズム（マスツーリズムと対峙，その矛盾を解消し持続可能な地域社会に寄与する観光行動実現のための理想と目標をあらわす形態）として登場したと言われること

も多いが，70 年代から認識されていたヨーロッパとは異なり，2000 年代になって注目され始めた日本では，現実には当初は切実な旅行需要拡大に向けた新規プログラムのひとつという位置づけに過ぎなかったように思われる。その背景には，むしろ，バブル景気やリゾートブームの苦い教訓があった。日本においてはマスツーリズムの弊害について充分な吟味がなされてきたのであろうかという疑問もある。その意味で，業界も行政もヘルスツーリズムをニューツーリズムの一環と位置づけようとしていることは興味深い。

インターネットの論文検索機能（MAGAZINE-PLUS）を活用してヘルスツーリズムを入力すると 28 件がヒットした。最も古いものは 2003 年 3 月（『立教観光学研究紀要』）である。2004 年には NTT データ経営研究所『経営研レポート』が総合的ヘルスツーリズム論「注目をあびるヘルスツーリズム」を掲載しているが，検索論文には鳥取県，鹿教湯温泉，塩原温泉郷，北海道上土幌町，天草，尾瀬片品地域，白骨温泉などの構想や事例の紹介も多く，ヘルスツーリズムは観光研究の専門家による理論研究というよりは，観光需要拡大が切実な課題となっている観光事業や観光政策立案の視点，または経営的視点から着目されていることが窺われる。

2005 年には JTB がヘルスツーリズム研究所を創設，また観光関連企業が中心となってヘルスツーリズム振興研究会（2007 年 2 月特定非営利活動法人日本ヘルスツーリズム振興機構に改組）も設立され，ヘルスツーリズムは一気に観光ビジネスの現場に登壇した感がある。

## 4. ヘルスツーリズムの定義

今日の日本において，ヘルスツーリズムの定義は必ずしも明確ではない。

もっとも広い定義としては，「健康に関わりをもつ観光すべての総称」や「健康増進を目的とする旅行」などであるが，医学的科学的根拠に根ざした健康への貢献を中核概念に据えようとする考え方もある。

来訪者に対して，地域ならではの自然資源（温泉・気候・空気・海洋・森林など）や食の効用を強力にアピールした健康づくり観光企画が各地で盛んに提案されている。さらに，医療機関と連携して PET や人間ドッグを組み入れたり，体験効果を医学的に測定したりしているところもある。また，健康スポーツとの連携を強調する取り組みもある。

独立した章を設けてヘルスツーリズムに言及している『観光の社会心理学 ── ひと・こと・もの 3 つの視点から』（前田勇・佐々木土師二監修，小口孝司編集，北大路書房，2006 年 3 月）では〈ヘルスツーリズムとは「健康にかかわりをもつ観光」の総称であって，近年になって一つの観光形態として認識されるようになってきた〉と記述されているが，定義というにはかなり柔軟で大雑把な捉え方である。

引き続き同書は海外での意味内容の例をあげているが，地域や時代によって微妙にニュアンスが異なっているようである。温泉療養を指す限定的なもの，健康回復や増進のための施設整備やサービスを取り入れるホテルやリゾートが経営戦略上のキャッチフレーズとして使用するケース，固有の自然資源や環境による健康づくりへの効果に着目した旅行行動，等々が解釈例として紹介されている。

また『観光・旅行用語辞典』（北川宗忠編，ミネルヴァ書房，2008 年 6 月）では，ヘルスツーリズムを〈旅行を通じて健康の維持増進や回復などを図ることを目的とした，旅行活動のひとつ〉とし，急速に進む高齢社会への対応として着目され，健康維持に役立つ旅行を推進しようとの積極的な動きが国土交通省や旅行業界に見られると付記している。なお同書は環境・健康・観光を 21 世紀の 3 K としている。健康を意識し，健康増進に役立つ旅行を推進するねらいで，国土交通省も新しい旅行形態として注目，旅行業界も関心を寄せており，〈旅行の健康への効用，影響を考慮した高齢社会に対応した旅行商品の開発が望まれる〉と結んでいる。

インターネット上には〈ヘルスツーリズムとは，

医学的な根拠に基づく健康回復や維持，増進につながる観光のことである〉〈温泉療法，森林療法，海岸療法（タラソテラピー）のほか，主に医療行為を受けるための手段として行われるメディカルツーリズムなども広義の意味でヘルスツーリズムに含まれる。近年，官公庁・旅行会社・地方自治体などが連帯して，ヘルスツーリズムに結びつけた観光資源開発が全国各地で行なわれている〉〈健康志向が高まる現在，日本におけるヘルスツーリズムの潜在市場規模は4兆円と言われる。しかしながら，こうした開発が確実に結実するには，受け地（旅行先）での人的資源を中心とした受け入れ体制や流通（商品化，販売）などに課題を残していると指摘される。また，近年では，開発の観点として，単に旅行中の健康効果（医学的，生理学的，心理学的等）に着目するのではなく，旅行をきっかけとしたQOL（生活の質）の向上を図るための手段として期待されるようになってきている〉などの記載が散見される。

メディカルツーリズムとは専門医療機関での健康診断や治療が主たる動機目的であり，PET検診や人間ドッグなど，他でも可能だがよりよい環境で旅行を兼ねて受診できることを掲げているものもある。大都市住民が自然環境のよい所に移動するケースだけでなく，地方在住者が大都市の有名医療機関での健診と都市観光をセットにして体験できるようなプログラムも増えている。

疾病予防，健康増進，健康阻害からの脱却等を目的とする手段的観光であるとして積極的消極的評価がある一方，日常生活圏からの移動という観光本来の要件を優先させサブ目的として健康関連を意識する観光と規定する立場もある。さらに日常の生活圏を離れた治療，転地療養，サナトリウム，温泉滞在などを含み，むしろこうした行動に観光の楽しさやレジャー的要素を加えて治療効果をあげるという考えもある。古来湯治にも建前はあり，観光手段として湯治を利用する庶民のレジャーライフも存在したのである。

湯治は今日では温泉療法といわれる。温泉を利用して心身の健康を回復させる治療法で，身体を休める休養，病気を癒す療養，予防する保養など広義に用いられる。一般には具体的な病気の症状を治すための医学的治療をさす。ヨーロッパの温泉利用はほとんどが療養であるという。

## 5. ヘルスツーリズムの考え方

### (1) ヘルスツーリズム研究所

JTBが2005年に設立したヘルスツーリズム研究所は，ヘルスツーリズム＝健康旅行・観光ととらえ，もっと健康になる旅，安心して参加できる旅をキャッチフレーズにしている。

ホームページには，医学・生理学・脳科学・心理学的な効果検証に基づいた健康機能特化型旅行商品，自然や地産食材など地の利を生かした健康旅行，健康保養型旅行，健康配慮型旅行などの言葉が散見されるが，〈私たちはヘルスツーリズム概念自体を創造していきます〉ともあるように，この言葉の意味をあえて限定せず健康にかかわるすべての旅行を包含しようとしているようにも感じられる。

### (2) 日本観光協会

日本観光協会はヘルスツーリズムをニューツーリズムの主要なひとつとして位置づけ，〈旅行という非日常的な楽しみの要素と健康を維持・回復・増進するための医療的な要素を掛け合わせた新しいタイプの旅行形態〉とした上で，〈自分の時間の中で，日常生活から離れて特定地域に滞在し，医科学的な根拠に基づく健康回復・維持・増進につながり，かつ楽しみの要素があるいつもと違う非日常的な体験，あるいは異日常的な体験を行い必ず居住地に帰ってくる活動〉と定義している。居住地以外への移動を前提とし，楽しみ的要素と医療的要素の両面の併存を不可欠としているようである。

### (3) 日本ヘルスツーリズム振興機構

2007年2月に特定非営利活動法人として認可された日本ヘルスツーリズム振興機構は，2005年11月にヘルスツーリズム振興研究会として発足した組織である。目的は〈健康・未病・病気の

方，また老人・成人から子どもまですべての人々に対し，科学的根拠に基づく健康増進・維持・回復，疾病予防に寄与する「ヘルスツーリズム」概念を確立し，広報・啓蒙を行い，「ヘルスツーリズム」（安全・安心で健康な旅）による健康づくりや疾病予防を促し，市民の健康生活に寄与する〉もので，〈安心・安全で楽しく健康な旅を通して健康増進・維持回復や疾病予防を図り，市民の健康生活の向上をはかる〉とともに〈こうした新しいツーリズムを活用し地域振興・活性化につなげることをめざす〉としている。

会員の多くは観光関連企業だが，健康関連食品メーカーも名を連ねている。

温泉療法，森林療法，海洋療法，動物療法，食事療法，運動療法から音楽や笑い，さらには特定検診とのセット，ダイエット，アレルギー対策，アンチエイジング，生活習慣病予防など実に多彩な領域と関連づけている。

### ⑷　国土緑化推進機構

社団法人国土緑化推進機構の森林セラピーポータルは，癒し効果が検証された森を森林セラピー基地や森林セラピーロードに認定し公開している。気持ちがいい，リラックスする，落ち着くというように感覚的に語られてきた森林浴の効果を，免疫力の向上など科学的に解明して，心身の健康に生かす試みが森林セラピーなのだそうだ。当然，対象となる基地やロードへの旅行はヘルスツーリズムの主要商品になりうる。

### ⑸　日本ヘルス協会

特定非営利活動法人日本ヘルス協会は“健康な人にはより若く美しく，不健康な人にはより健康に，病の人には最善の医療を”をスローガンに2001年に設立され，〈健康と観光を融合した新しいツアー〉を企画し実施している。

## 6. ニューツーリズムとしてのヘルスツーリズム

『平成19年版観光白書』は19年度の観光施策の中でニューツーリズムの創出・流通の促進を掲げ，〈長期滞在，エコツーリズム，ヘルスツーリズム等の地域独自の魅力を生かした体験型，交流型の新たな旅行形態であるニューツーリズムの創出と流通を促進するためのデータベース構築や実証事業の実施等によりニューツーリズム市場の形成を支援する〉と記している。ここに至って，ヘルスツーリズムは観光行政施策として明確に位置づけられることとなった。

国土交通省は「ニューツーリズム創出・流通促進事業」を展開し，対象分野として産業観光，エコツーリズム，グリーンツーリズム，ヘルスツーリズム，ロングステイ，文化観光の6分野を例示しており，19年度採択の47事業中には11事業のヘルスツーリズム関連事業が含まれている。ヘルスツーリズムについては，〈自然豊かな地域を訪れそこにある自然，温泉や身体に優しい料理を味わい心身ともに癒され健康を回復・増進・保持する新しい観光形態であり，医療に近いものからレジャーに近いものまで様々なものが含まれる〉と説明している。日本の行政におけるヘルスツーリズムの定義といえよう。

国土交通省の説明によればニューツーリズムとは，従来の旅行とは異なり旅行先での人や自然との触れ合いが重要視された新しいタイプの旅行である。旅行会社主導ではなく，地域の立場から特性を活かすことが一番であるため，地域活性化につながる新しい旅行の仕組みであり，体験・交流・学習がキーワードとされ，着地型観光という用語もよく見かける。かつて，従来型観光がもつ負の要素への反省から，観光は目的地に着いてから始まるのではなく，移動もまた観光の一部であり，移動の魅力や効用を評価し，時には移動自体を主目的とするような観光が提唱され支持された時期もあった。しかし，昨今の着地型観光は現地での目的重視であり，移動のプロセスを軽視する傾向が見受けられなくもない。

最近ツーリズムに様々な冠を有した造語が氾濫している。印刷物で見かけたものを順不同であげてみる。

ヘルスツーリズム　グリーンツーリズム　エコツーリズム　ヘリテイジツーリズム　ブルーツーリズム　ハードツーリズム　バリアフリーツーリズム　メディカルツーリズム　サイトツーリズム　コンテンツツーリズム　フィルムツーリズム　シネマツーリズム　ロケツーリズム　産業観光　文化観光　オルタナティブツーリズム　ソフトツーリズム　レスポンシブルツーリズム　サスティナブルツーリズム　フラワーツーリズム　スペシャルツーリズム　着地型観光　アーバンツーリズム　エアラインツーリズム　エスニックツーリズム　クルーズツーリズム　ソーシャルツーリズム　ルーラルツーリズム　アドベンチャーツーリズム

こんなにも言葉が作られているとは，まさに21世紀は観光の世紀である。

今日の観光をマスツーリズムからの脱却，マスツーリズムへの批判や反省からとらえ活路を見出そうという立場の妥当性はある程度は定着してきたように見えるが，その一方でいま少し別の見方をしようとする試みもある。どこへ行くかから何をしに行くかが重視されるようになった変化にこそ着目すべきではないか。ヘルスツーリズムはマスツーリズム批判よりも，こうした観光行動の変化が生み出した予測された結論ではないかと考えることもできる。

日本においてマスレジャー，マスツーリズム型観光が主流であったのはいつごろのことであろうか。例としてあげられるものに大阪の万国博覧会があるが，これは1970年のことであり，すでに40年近い歳月が過ぎている。観光行動における観光地選択の変遷は以下のような整理が可能と思われる。

ステージ1：行くか行かないかの時代
　どこでもよいから行くことに意味
ステージ2：どこへ行くかの時代
　有名観光地へ行く
　無名景勝地を見つける
　プライベートメモリアルの地へ行く
ステージ3：何ができるか
　現地で提供されるものから選択
ステージ4：何をしに行くかの時代（手段的観光，目的達成）
　やりたい事があり，それができる地を選ぶ
ステージ5：何のために行くか（目的的観光）
　観光によって体感できる価値の実現が選択の基準

目的を強く意識した観光，特別の目的を持った観光をスペシャルツーリズムと呼ぶことがある。ヘルスツーリズムの範囲を強い健康動機に厳格に限定して，このスペシャルツーリズムの範疇に入れる立場もあるが，一般的にはニューツーリズムとしてのヘルスツーリズムは上記のステージ3〜4の段階にあると見てよいのではないだろうか。

## おわりに

ヘルスツーリズムという言葉は新しいが，実は必ずしも新しい旅行形態ではない。自治体や旅行会社が商品価値に気づき，商品企画の対象になったことにより新しい形態として認識されたものである。

健康を目的とした旅行は長い歴史を持ち観光動機としても重要な役割を果たしてきた。

有名なグリュックスマンが1935年に整理した観光原因研究では，観光動機として心的・精神的・経済的と並んで身体的なもの＝疾病予防を取り上げている。1930年代のドイツの実態を踏まえ，観光を遊覧客と療養客，さらに短期と半月以上滞在の長期とに区別している。1950年田中喜一は「観光事業論」（観光事業研究会）研究の中で，観光動機としての身体的動機を，疾病予防という一括ではなく治療欲求・保養欲求・運動欲求とに分類しているが，この治療欲求をどのレベルまで含むかが今日のヘルスツーリズムの課題であろう。

日本のもっとも伝統的・代表的な旅のスタイルである湯治は，まさしくヘルスツーリズムであるが，物見遊山の建前としての湯治も存在したようであり，また転地療養という習慣もあった。リゾート地のサナトリウムという施設もあり，堀辰雄の

小説世界を生んだ。心身に快適な環境を求めて移動した避暑・避寒もリゾートライフも，ヘルスツーリズムの範疇に入れることは可能だろう。

心理的精神的な効果という面では，すべての観光はヘルスツーリズムにつながるともいえる。そもそも心身の健康に好影響を及ぼさない観光は，観光ではない。

その上で，それでもヘルスツーリズムをひとつの観光ジャンルとして特化し，定着・普及させるには，提供側の地域が独自のヘルスツーリズム観をきちんともって，プランを発信していくことが必要だろう。

その際留意すべきことは，日本観光協会の定義にあるように，楽しみとしての観光と医科学的な健康効果の比重をどうするか，また医科学的という面にどこまでこだわるか，治療や直接的な改善を目的としたものを取り込むか，地域の持つどの自然資源の優位性を重視するかといったあたりだろう。日本ヘルスツーリズム振興機構が「地域振興活性化を目指す新しいカタチ」というのは，ヘルスツーリズム的取り組みへの着手が地域資源点検のきっかけになりうるとの確信からであろう。

私自身は，ヘルスツーリズムはあくまでもツーリズムであると考えている。従って，医科学的効果への過度のこだわりや，具体的かつ切実な治療・療養目的の移動や来訪は，馴染まないのではという思いがある。ツーリズムによる健康への効果は，直後の検査のように短期間で直接的に判断できるものではあるまい。ただし，ヨーロッパではたとえば整形外科的疾患の温泉療養施設がリゾート地にあって，中長期に家族が訪問してホテル兼医療施設で一緒にリゾートライフを楽しめるといった事例を仄聞すると，より柔軟な理解もありうるという気はしてくる。

いずれにしても，高齢社会，健康志向，自己投資の時代にあって，健康を切り口に地域資源を見直し再構成して発信するヘルスツーリズム的な余暇・観光の位置づけが需要サイド供給サイド双方で高まることは，これからの必然の方向であろう。

本稿を通じて明らかになった見解は以下の通りである。

(1) ヘルスツーリズムはヨーロッパで1970年代半ばに登場した。背景には健康観の変化と医療保険制度の変革要請があり，それがマスツーリズムからの脱却を模索する観光サイドと結びつきオルタナティブツーリズムと捉えられた。

(2) その経緯から日本でもオルタナティブツーリズムとして位置づけられることが多いが，時期的にいってもその解釈は必ずしも妥当ではない。むしろ，バブル崩壊前後の生活価値観の変化や大規模リゾート政策の失敗を教訓とし，低迷する観光需要開拓に向けた地元主導の観光地づくりやニューツーリズムメニュー探求の成果と受け止めるべきものである。

(3) ヘルスツーリズムを含むニューツーリズムへの着目は，観光の動機が〈どこへ行くか〉から〈何のために行くか〉へ移行した結果でもある。これは観光の進化・高度化であると同時に，観光を合目的的行動から手段的行動へと変容させ，また観光独自の価値である移動プロセスを軽視する危惧もはらんでいる。

(4) ヘルスツーリズムの魅力づくりとして，理念でもビジネスでも政策でも健康効果の科学的根拠を謳う例が多いが，実際の効果について結局は充分検証されていない。そもそも短期間で検証可能なものでもない。この点にどこまでどの程度こだわる必要があるのかについてもっと柔軟でいいのではないか。主体は観光であり，余暇である。

(5) 病気治療のための転地療養などは，ツーリズムではなく療養と理解すべきである。

(6) ヘルスツーリズムは，健康への広範な貢献という見地から，自然環境・気候・食文化など地域固有の資源を再構成するというプロセスを通して，地域を総点検する機会として有効である。また高齢社会の根強い健康志向はますます加速することが予測されるので，今後の観光の柱のひとつとして注目され続けるであろう。

## 参考文献

『観光の社会心理学』前田勇・佐々木土師二監修　北大路書房　2006年3月
『観光・旅の文化』北川宗忠著　ミネルヴァ書房　2002年4月
『観光・旅行用語辞典』北川宗忠編著　ミネルヴァ書房　2008年6月
『研究活動レポート2008 ── ヘルスツーリズムの推進に向けて』日本ヘルスツーリズム振興機構編集発行　2008年9月
『平成19年版観光白書』国土交通省
『レジャー白書2004』社会経済生産性本部編著発行　2004年7月
『レジャー白書2005』社会経済生産性本部編著発行　2005年7月
『レジャー白書2009』日本生産性本部編著発行　2009年7月
「尾瀬片品地域におけるヘルスツーリズム推進のための課題について」一場博幸・村松保枝著　『日本観光研究学会第23回全国大会論文集』　2008年11月
「昨今の余暇・観光動向とヘルスツーリズム」米村恵子　『香川経済研究所調査月報』　2009年11月
「注目をあびるヘルスツーリズム」鈴木紀秀著　『経営研レポート2004』　NTTデータ経営研究所　2004年

### ホームページ

JTBヘルスツーリズム研究所
日本観光協会
日本ヘルスツーリズム推進機構
国土緑化推進機構
日本ヘルス協会